

南洋に浮かぶ癒やしの島

# 多良間村

- 面積——19.39km<sup>2</sup>
- 人口——1,363人(平成19年7月31日現在)
- 村鳥——ウズラ
- 村花——タマバナ
- 村花木——センダン
- 村魚——ニバリ

## 手つかずの豊かな自然と歴史・文化に彩られた島

多良間村は宮古島と石垣島のほぼ中間に位置し、多良間島と水納島の二島から成っています。琉球王朝時代には中継貿易で栄え、沖縄本島と宮古、八重山を結ぶ航海上の要所でした。

島のほとんどの陸地が耕作地として利用され、周囲を囲む美しい珊瑚礁や緑豊かなフクギ並木、鍾乳洞に流れる豊富な地下水など、手つかずの自然が多く残る場所として知られています。



珊瑚礁に囲まれた平坦な多良間島

## 平坦な地形と豊かな自然を生かした農業・畜産業が盛ん



一島一品運動で全国的な話題になっている「多良間ビンダ(ヤギ)」

多良間村の主な産業は農業で、サトウキビを中心に野菜や葉たばこ等の農作物が栽培されています。384年の歴史を持つ「多良間黒糖」は島産サトウキビを使った特産品として根強い人気があります。かつてはカツオ漁などの漁業も盛んでしたが、近年は草地開発やセリ市場の開設によって、畜産業が盛んです。

## 「八月踊り」に代表される文化財や遺跡の数々

「ウブメーカー」(開拓の祖の墓)や八重山遠見台など多くの史跡や文化財が点在する中で「八月踊り」は、琉球王朝の宮廷舞踊を今に伝える奉納行事として国指定重要無形文化財に指定された多良間を代表する祭り。運城や塩川といった数々の御獄や遺跡、植物群落など見どころも豊富です。美しい海に囲まれている多良間村は、海水浴やシュノーケリング、ダイビングのスポットとしても人気があります。



多良間を代表する奉納行事「八月踊り」



野火が迫る中、必死に卵を守るうすらの母さん



沖縄本島

# うつつじゃが母

## 多良間島のわらべうた

民謡とわらべうたで巡る	監修 ● 宮城葉子 イラスト ● 本原健至
ふるさと	
と	
唄	
紀行	

県内各地に残る民謡やわらべうたは、懐かしい風景や当時の暮らしぶりを伝えてくれます。  
うちな〜の唄が誘う地域の旅へ、まじゅん行かな(さあ出かけましよう)!

### 母親の深い愛情を唄った 多良間島のわらべうたと民謡

野火に遭ったうすらの母鳥が自分を犠牲にしても我が子(卵)を守り通す、強い母性や愛情がドラマチックに唄われています。歌詞の対句表現も特徴的で、「うすらの母よ子よも母よ」という唄い出しから、「片羽が焼けても二羽が焼けても」という中盤、そして最後に到るまで、すべての歌詞に類似のフレーズが二度繰り返されます。後半から叙情的に転調する流れもユニークです。また、作者の視点はうすらの母子だけでなく海の千鳥たちへも注がれ、母子の強い絆や愛情、「母子」が共にいることは美しい」と讃えています。

この唄には同じ内容の民謡があります。ある日、つがいのうすらが野火に遭い、「くすくすしている」と死んでしまつ。早く逃げよう!」と父さんうすらは逃げ腰に。四個の卵を温める母さんうすらは逃げようともせず我が子を守ります。結局、父さんうすらは母さんうすらと卵を置いて飛び立ちますが、母さんうすらは野火を乗り越えてひなをかえし、戻ってきた父鳥と家族みんなで仲良く暮らしたという物語です。

### 「うつつじゃが母」

うつつじゃが母よ とうぬかが母よ

野火ぬ 出でいりば 焼火ぬ 出でいりば

じゅべーた飛うばがら じゅべーた舞やがら

うわ飛うばがらだ うわ舞やがらだ

片羽が焼きとらん 二羽が燃いとらん

ばが子ととうみ ばが卵ととうみ

とうとうみぬ 美しや うが美しや とうとうみ

海千鳥がまよ 浜千鳥がまよ

白浜ぬ 真中ん 美浜ぬ 真中ん

うるみーや しゅんしゅん

かるみーや ぬずんぬずん

\*「うつつじゃが母」は宮古の方言でうすらの意味。

(標準語訳)

うすらの親よ 卵の親よ

すわ野火が出たぞ 野原が焼け出したぞ

さあさあ早く僕らは飛び立とう

さあさあ一刻も早く

お前は先に逃げなさい

早く早く早く急いで飛び立ちなさい

私は片羽が焼けても

両羽が焼け落ちても全然構いません

どこまでも可愛い子どもや卵ともろとも

このうすらの心情、これほどまでに何と美しいことか

海辺に遊ぶ千鳥たちや 砂浜に遊ぶ海鳥たちは

安全な場所に無事でうすらの親子の無事を祝いながら

安全地帯の美しい白浜の上で

お互いに見えながら感謝し

うすらの母性愛に泣いた

\*出典 「島のむかし歌」

多良間村古謡収録制作委員会、多良間村

